

日本語の押韻がもたらす 記憶効果についての研究

阿部研究室 19L1034F 河野寛大

1. はじめに

近年、韻を踏んだキャッチコピーをよく目にする。韻は大きく分けると、フレーズの末尾で韻を踏む脚韻と、フレーズの頭で韻を踏む頭韻に分けられる。Nhi(2019)によると、英語などの一部の言語圏では、人々が童謡やスローガンで韻にさらされて育ってきたため、韻を踏んだ言葉に対して反応が鋭い。McGlone&Tofighbakhsh (2000) や Filkukova&Klempe (2013) は、韻を踏んだ言葉がそうでないものよりも記憶に残り、また説得力も感じる効果を *Rhyme-as-reason effect* と呼び、英語などでこれは認められている。一方、文部科学省唱歌でもほとんど韻が踏まれておらず、育つ中であまり韻にさらされていない日本語では、*Rhyme-as-reason effect* は認められていない。現状の問題点として、日本語では韻を踏んだフレーズの記憶への効果についてあまり調べられていない。そのため、日本語でも韻を踏んだフレーズは記憶に残りやすい効果があるのかを調べた。

2. 実験

本研究においては、実験は全部で4回行った。1回目の実験では、韻を踏んだフレーズとそうでないフレーズとで記憶に残りやすいか否かをオリジナルのフレーズを用いて、アンケート形式で記憶に残りやすいと感じるかどうかを調べたが、フレーズの長さや韻を踏む回数、韻となる一致文字数のばらつきから結果に有意差は生まれなかった。

実験2ではフレーズの長さ、韻として一致する文字数を統制して、5.7.5の長さのフレーズを作り、アンケート形式で記憶に残りやすいと感じるかどうかを調べる実験した。結果はどれも大きな差異はなかった。

実験3も同様にアンケート形式で記憶に残りやすいと感じるかどうかを調べた。こちらでは韻となるフレーズ内の部分の一致文字数を変えて、強い韻と弱い韻を用意したが、特にどの系統が記憶に残りやすいといった有意差は見られなかった。

以下で紹介する実験4は、これまでは「記憶に残りやすいと思うか」と聞いていただけだったのに対し、実際にフレーズを提示してから思い出させる実験形式で行うことで、本当に韻を踏んだフレーズが記憶に残りやすいかを調べたものとなっている。

2.1. 目的

日本語でも、韻を踏んだ言葉は記憶に残りやすいかどうか調べる。

2.2. 方法

参加者は大学生を中心とした 18~20 歳の男女 52 名だった。「フレーズの評価に関する実験」と伝え、本実験オリジナルのフレーズを教室の前方スクリーンに PowerPoint を用いて提示した。実験 2 以降と同様、参加者をフレーズ刺激に集中させるためイラストの提示は行わなかった。スクリーンに表示されるものに合わせて、フレーズは抑揚がない音声になるように iOS にて配信されている音読 (Yukari Kikuchi(<https://apps.apple.com/jp/app/%E9%9F%B3%E8%AA%AD/id1487352741>)) 2023 年 1/23 最終確認 のアプリを使用して発音され、各フレーズは 5 秒ほどの間隔をあげ、2 回ずつ発音された。

用意したフレーズはどれも文字数を 5・7・5 の 17 音に統制し、

脚韻を踏んだもの

頭韻を踏んだもの

韻を踏んでいないもの

を各 4 フレーズ、またそれらのフレーズの半分は固有名詞を含むものとした。韻を踏んだフレーズでは、韻を踏む回数は 2 回とし、一致する文字数はローマ字 3 音分とした。なお、各フレーズは 10 秒ほどの間隔をあげ、2 回ずつ発音された。回答は Google form にて、それぞれのフレーズについてどう感じたかを、明るい/暗い、現代的/古典的、軽快/重々しい、楽しい/つまらない

の 4 項目について回答させた。

全フレーズに関して評価させたのち、それまでに提示したフレーズの順番をシャッフルして穴埋め形式の問題にし、中 7 文字をヒントとした状態で下 5 文字を可能な限り書き出すよう答えさせ、その理由も答えさせた。

使用したフレーズは以下のものである。

あの選手 暮らした母国 クロアチア

すぐ近く 目と目の先に メタバース

日本発 生まれた人気 うまい棒

手続きに 毎度必要 マイナンバー

曇天に 気分うつむき 雨続き

こどもの日 ひらひら踊り こいのぼり

疲れ取る 大切な明日 サロンパス

リフレッシュ 澄み渡る空 コカコーラ

よく見ると 柄がたくさん マンホール
 犯人を 追いつ捜査の 正義感
 出かけよう お花を探しに ハローキティ
 本・ゲーム なんでもあるよ ブックオフ

2.3. 結果

各系統の正答率が下図である。

	固有名詞	固有名詞	一般名詞	一般名詞
脚韻	61.54	46.15	32.69	51.92
頭韻	75.00	65.38	57.69	86.54
韻なし	78.85	19.23	61.54	50.00
平均正解率				
	固有名詞	一般	総合	
	53.85	42.31	48.08	
	70.19	72.12	71.15	
	49.04	55.77	52.40	

平均点としては、脚韻を踏んだものの正答率が 48.08%、頭韻を踏んだものの正答率が 71.15%、韻を踏んでいないものの正答率が 52.40%となり、頭韻を踏んだものの正答率が高くなっていた。この結果について分散検定を行ったところ、 $p=0.199$ ($p>.05$)となり、どの系統が記憶に残りやすいといった有意差は認められなかったが、数値的には大きな正答率の差が生まれていることは事実である。

また、固有名詞を含むことによって正答率が上がるか否かに関しては、固有名詞やフレーズごとのばらつきが多かった。

2.4. 考察

これらの結果から、フレーズにおいて頭韻や脚韻を踏むことでリズムや響きが良くなることはあるのだろうが、記憶に残りやすくなるとはいえないことがわかった。各参加者の回答に添えられた、なぜ記憶に残ったかの自由記述では、「韻を踏んでいたから記憶に残った」「頭文字が『メ』だったことだけ覚えていた」といったように、韻を踏んでいたことを知覚できていた参加者が何人かいた。そうした回答をしていた、韻に対する

感度の高い者はこうしたフレーズを記憶することに長けているのだろう。また、韻の有無、固有名詞の有無にかかわらず、一部のフレーズは正答率が高くなっていた。その例として、「あの選手 暮らした母国 クロアチア」は、フレーズの一部を予備実験から変更したにも関わらず 86.5%もの参加者が正解していた。約一カ月前に開催されたワールドカップの影響は無視できず、おそらくこのフレーズは国名を他のものに変えることでバランスが取れたであろう。知名度が低い国名で5音のものを探して韻を踏むことは難しくないので、そうした統制が必要だった。

また、「出かけよう お花を探しに ハローキティ」は、第三次実験と同じく固有名詞のインパクトの強さから正答率が高く 78.9%となっていた。こうしたことから、どのようなフレーズが記憶に残りやすいかについては、より聞き馴染みやインパクトのある言葉を用いることや、各個人がどのような要素に惹かれるかが大事であり、韻を踏むことはその一要素でしかないという結論に至った。

3. 総合考察

今回は韻を踏んだフレーズは記憶に残りやすいという仮説のもと実験を行い、結果として韻は言葉が記憶に残りやすくなる要素のうちの一つの要素に過ぎないという結論が出た。

また、Rhyme-as-reason memory の観点で考えると、韻を踏んだフレーズが記憶に残りやすいのみならず、言葉としての説得力があるかどうかについても調べないと実証ができたとはいえない。

様々な実験における各参加者の自由記述欄には、「韻を踏んでいたから記憶に残った」という記述が一定数あり、またそう答えた参加者がもっとも記憶に残ったと答えていたフレーズは脚韻を踏んだものであったことが非常に多かった。韻の認識として、やはり日本でポピュラーなものは脚韻であり、頭韻を含むフレーズに関しては「韻」であるとは意識していなかった参加者が多数いたことが見受けられる。しかし、頭韻を踏んだフレーズに関しても「同じ文字の繰り返しで記憶に残った」という意見もあり、頭韻は意識されずとも言葉の響きの良さから人々に印象に残ったといえるだろう。初めに述べたように、日本語の自然な文で韻を踏むことは難しい。2022年現在のラップブームの影響が一過性のものとならず長い期間にわたって続いていったとしたら、広告などにおける韻の使用頻度や影響は変わっていくかもしれない。